インタビュー

人間・啄木に魅せられて

井上ひさし氏の評伝劇の一つ、「泣き虫なまいき石川啄木」が、鵜山仁氏の初演出で、24年ぶりに再演されます。啄木を演じるのは、ミュージカル俳優、歌手、演出…とマルチに活躍する西川大貴さん。舞台に寄せる思いを聞きました。

こまつ座「泣き虫なまいき石川啄木」で主演

俳優＆クリエイター 西川大貴（たいき）さん

劇は、啄木の死後、夫の日記を読む妻・節子の回想で始まる。生活の困窮、嫁姑の争い、おそいかかる病…。舞台は1909（明治42）年、東京市本郷の貸間へとさかのぼり、啄木「最後の3年間」をユーモアと涙を交えて浮き上がらせる。

◇

台本を読んだ時、家族の愛やその関係性のねじれ、才能への不安など、自分も体験した、目を背けたくなるような感覚が散りばめられていて、グッと心に刺さってくる。そんな第一印象でした。

啄木の歌で衝撃を受けたのはこの2つです。

「一度でも我に頭を下げさせし人みな死ねといのりてしこと」

「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ花を買ひ来て妻としたしむ」

なんか、すごくわかる。自分よりも周りの人がみんな偉く見えるけど、でも真なる詩人、アーティストとして自分を越える人間はいねぇ、みたいな。そういうことを啄木は本気で思っているのですが、次の瞬間には〝ダメだぁ〟って落ち込むみたいな。そういう感じって20代の頃って、あって当然だと思います。

26歳で亡くなった啄木は私より年下なので、「しっかりしろよ」と身近にいる後輩みたいに感じる時もあれば、近くに感じるからこそ、自分との違いにギャップを感じたりを繰り返しています。稽古が始まり、家族や親友・金田一京助さんの中にいる啄木像はまた違ってきます。

実人生に両足をつけながら、上っ面ではない言葉を綴ろうともがいた晩年の啄木。妻・節子なのか、母、父なのか、誰の視点から見るかで、この劇の見え方は違ってくるかもしれません。舞台から何を受け取っていただけるか、楽しみです。

金田一京助役の眞島秀和さん（左）と

＜東京公演＞12月5日（金）～21日（日）／東京・紀伊國屋サザンシアターTAKASHIMAYA
＜岩手公演＞12月24日（水）盛岡／26日（金）西和賀町／問合せ　03-3862-5941こまつ座

ずいそう

先日、見た夢

雒井ゆい（現代美術作家）

先日、夢を見ました。自分には、生まれてからずっと預けっぱなしのもうひとりの子どもがいるので迎えに行かねば、と泣いている、という内容でした。現実にはそのような子はおらず「変な夢だなあ」と目を覚ましたのですが、しばらくしてハッとしました。

私は体外受精を経て出産しました。通常体内で行われる受精が体外で行われた後、胚に成長した受精卵が子宮に移植されることで、妊娠・出産に至ります。この過程で得られた胚のうち、移植されなかった「余剰胚」は冷凍タンクの中で保存されます。理論的には半永久的な保存が可能ですが、現実には、患者は移植か廃棄かを決めなければならず、そしてその決断の背後にある「子どもを殺すに等しいのでは」という葛藤はほとんど誰とも共有されません。自身の経験を通して知ったこのような現状を、数年前に作品のテーマにしました。生殖医療の世界を垣間見て、命にまつわる重い選択に個人が直面しているということに驚き、同時に、個人レベルではなく社会的な話だとも強く感じたからです。

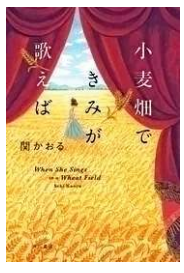
その時は自身が当事者であることを作品に出すことはありませんでしたが、私にもひとつだけ病院に預けて廃棄した胚がありました。冒頭の夢はそのことが心の奥底にあったからだと思います。

近年話題の卵子凍結など、医療技術や女性のキャリアの側面が語られがちですが、そこに伴う新しい感情や悩みも広く共有されるべきなのでは、と考えています。

BOOK

小麦畑できみが歌えば

関かおる



北海道の小麦農家でのびのび育った18歳の唯吹（いぶき）は祖母の影響で歌うことが大好き。憧れの人を追いかけ、地元のオペラハウスのオーディションを受けるが不合格に。しかしアメリカのオペラハウスのサマーキャンプへの推薦をもらい…。仲間と出会い自分は空っぽだと自信を失う唯吹。自分の「楽器（声）」と向き合い、歌う目的に悩みながら、演じる役柄と仲間を理解していく。オペラを聞いてみたくなる。小説野性時代新人賞受賞後第一作。

KADOKAWA　1850円＋税

ゆっくり歩く

小川公代

文学を通じて「ケア」を語ってきた著者の母が、パーキンソン病と診断を下された。娘や父、周りの人をケアして生きてきた母が小さく弱くなり、「なんでこんなことになるん？」と問いかける。そこで著者は、母の生きる力を奮い立たせるような古今東西の作品の言葉を読んで聞かせる。ボルヘス、ハン・ガン、日蓮聖人…。ゆっくりとしか歩けない母といっしょに歩くことで著者が新しく到達した、「ケア」理論の実践編だ。

医学書院　2000円＋税

代田知子さんおすすめの 子どもの本 大人もぜひ！

山の神の使い
最上一平　作
マメイケダ　絵
童心社　1700円＋税
（小学校中学年～）

ファイティング・チャンス
ルイーザ・リード　作
金原瑞人・八木恭子　訳
岩波書店　1900円＋税
（中学生～）

まるがかけたら
武田美穂　作・絵
理論社　1600円＋税
（幼児～）

新米の季節。まずは『**山の神の使い**』から。東京に住む小学生の大河は、５月の休みに父さんと山形に来た。集合した父さんの兄弟２人と一緒に、じいちゃんの田んぼの田植えをするために。じいちゃんはもう、ほとんど目が見えない。でも、田んぼの泥や苗にさわれば、ようすがちゃんと分かる。夏は大河ひとりで山形に来て、じいちゃん、ばあちゃんと過ごした。秋は、みんなで稲刈りだ。美しく力強い自然とじいちゃんの生き方がみずみずしく描かれ、田んぼを守る家族の姿も心に残る。

２冊目は、イギリスを舞台とする『**ファイティング・チャンス**』。主人公は、太っているという理由で、学校でいじめを受けている16歳のリリー。母親も「太りすぎ」を苦に家に閉じこもっている。ある日、リリーが同級生男子からひどい暴力を受けて帰ると、父親が絞り出すように言った。「負け犬になるんじゃない」。父親のすすめでボクシングを始めたリリーは、自分の心と体に向き合い、徐々に自身の強さにも気づき始める。主人公が、自力で希望をつかんでいく姿が感動的だ。

最後は、絵が苦手な子も、主人公と一緒にかいてみたくなるユニークな絵本『**まるがかけたら**』。まる〇をかくのは難しい。でも、練習すれば上手くなるよ。まる〇がかけたら、「ふうせん」「おはな」「おたまじゃくし」…。まる〇から始まり、さんかく△、しかく□と、単純な線だけでお絵かきを楽しんでいく。家庭や保育園でぜひ！

編集部から

２面、食品ロスを減らすとりくみを寄せてくれた徳島支部。環境部長が、地元小学校の出前講座で「ごみゼロ」講師を務める活動も。学びを力に地域でできることを一歩ずつ広げる姿に励まされた。（あ）